

## 「キリストにある新しい人」

主任牧師：重田 稔仁

<メッセージ>

ヨハネによる福音書 11：38～54

キリストにある新しい人

過去の自分と訣別して新しい人生を歩みたい。新しく生まれ変わって人生をやり直したいと思ったことないでしょうか。

私は20歳の時に強くそう思いました。

このまま行くと自分は終わってしまうという焦りを感じていました。大学受験生に失敗して毎日パチンコ屋に通うようになり、パチンコ依存症になって予備校に通えなくなり、自分への怒り、将来への不安、虚しさを忘れるために毎晩飲み屋に入浸るといいうい今では信じられない10代後半の日々でした。

そんな不安の中でイエス様と出会いました。イエス様との出会いは私に新しい人生をもたらしました。そんな体験を若い頃、歌にしました。(誰でも生まれ変われるさ！)

イエス様がくださる新しい人生について使徒パウロはこう言っています。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」

コリントの信徒への手紙二 5:17

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」

コリントの信徒への手紙二 4:16

イエス様に結ばれて歩む人生は、私たちの内なる人を日々、新たにするとパウロは証ししていますが。それは具体的にどう言うことでしょうか。

多分、私たちの多くが“新しくされる、創造される”、と言う表現に

“人間性が変わる”いわゆる私たちの好み、性格、性癖、指向、考え方、物の見方が変わるというイメージを持っていないでしょうか。

今朝はお互いの体験やイメージを一旦横において“聖書”はイエス様にあって(イエス様に結ばれて)人が新しくされることについてどう教えているか考えてみたいと思います。

今朝のメッセージのテキストは、主イエスの復活を記念するイースターの日曜礼拝でしばしば取り上げられる聖書箇所ですが、このテキストは私たちにイエス様にあって、イエス様に結ばれて生きる者に約束された新しい人生の内実を証ししています。

朗読ヨハネ 11:38-54

「イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。」ヨハネによる福音書 11:38-44

イエス様と親しい間柄にあったラザロが病で危篤状態に陥ったため彼の姉妹マリヤとマルタはイエス様に助けを求めました。その様子がヨハネ 11:1~5 に記されています。不思議なことにイエス様は、ラザロ危篤の報を聴きながら「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」と返答して同じ場所に2日間滞在なさったのです。そしてその間にラザロは死んでしまったのです。するとまるでラザロが死ぬのを待っていたかのようにイエス様はラザロのもとへ出かけたのです。

何故、イエス様はそのようなことをなさったのか、イエス様の思惑、意図を解き明かしているのが先程お読みしたヨハネ 11:38~44 です。

イエス様がマルタとマリヤの家に到着したときラザロは墓に葬られ既に4日経っていたとヨハネ 11:7 にあります。ラザロの姉妹、マルタとマリヤのもとには大勢のユダヤ人達が姉妹を慰めるために集まっていたようですが、到着したイエス様に向かってマルタとマリヤはそれぞれ同じことを言いました。

「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」ヨハネによる福音書 11:32

マリヤがそう言って涙を流し、一緒にいたユダヤ人たちが涙する姿に心を揺さぶられたイエス様は憤り、涙したと 11:33~35 に記されています。

憤った=激しく感情を揺さぶられた

そんなイエス様の姿にその場に居合せたユダヤ人たちが

「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。

しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか」と語るのを耳にしてイエス様は再び憤ったのです。

ここで、先程の問いです。

何故、イエス様はラザロが死ぬのを待ってラザロのもとへ出かけたのか。

それはイエス様が、イエス様をこの世に遣わしたご父なる神様の栄光を顕すため！

「イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」

ヨハネによる福音書 11:4

“神様の栄光を顕す”とはどういうことか、

それは人間の目を覆い私たちに神様の栄光を見えなくさせている罪とその報酬、死を打ち破ることです。イエス様はこの一事のために愛するラザロが病で死ぬのを待って墓に葬られていたラザロを死から蘇らせたのです。

「こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどこいてやって、行かせなさい」と言われた。」ヨハネによる福音書 11:43-44

ところでこのラザロ復活の物語は私たちに何をメッセージしているのでしょうか。

それは…イエス様によって人は罪に死んだ者から神の命に生きるものになる、すなわち死から命に移されるということです。

これがイエス様にあつて人が新しくされるという聖書が解く真理の実体です。

罪に死んでいたとは、

人が神の慈しみ、神の憐みを知らず自分の欲するままに生きていたという意味

神のいのちに生きるとは、人が神の憐みを知り、神の慈しみに応えて生きるということです。

神の憐みを知り、神の慈しみに応えて生きるとはどういうことか。

それはこの世の変わりゆく相対的な愛を基として生きるのではなく、永遠に変わらない絶対的な神の愛を基として生きるということです。

私たちがイエス様にあって神の愛を基として生きる時、人はイエス様にあってどんな、生まれ、育ち、過去、をもっている自分も愛され、大切にされている存在だ！という自覚が与えられるということです！この自覚が与えられると他人と自分を比較して劣等感を抱いたり、他人を羨んだり、世間の評価を気にしたり、風に揺れる葦のように他人の言動で自分を見失ったりしなくなります。それは…誰が何と言おうと”この私は”神様にとってかけがえない存在なんだ！という自覚が与えられるからです！これが、イエス様にあって人が新しくされるという幸いの中身です！

皆さん、このイースターの朝、イエス様のことばに心の耳を傾けて見ませんか！

イエス様は、あなたを死からいのちへと移すため、あなたが相対的な人間の愛に振り回されず、あなたが永遠にかわらない神の愛にあなたが生きるようになるたむや、あなたの人生を一新するため、あなたの名を呼んでこう大声で叫んでおられます！

出てきなさい！

祈り